

●「言い名付く」技の妙

アレックスandro・マンゾーニ著／平川祐弘訳

『いいなづけ——十七世紀ミラーノの物語』



●稲賀 繁美 (三重大学助教授)

大学の外国語の授業でたまさか講読したとき忘れていた筈の本が、卒業して後の外国留学生生活か何かの節目に、不意に忘却の彼方からその姿を現わす。その登場人物の誰彼が、まるで仲人のように振る舞って、異国の友との縁を取り持ってくれる。その時になつてはじめて、若い頃に海外の名作に触れて、その一節なりとも記憶の底に眠らせて置けたこと、思い設けぬ貴さが、なにか気恥ずかし

く、身に沁みる。青臭学生の頃には、何の因

果で古臭い古典など読まされる羽目になったのか、などと罰あたりな愚痴ばかりこぼしていたのだから。

だが、いざ外国暮らしをしてみると、所詮付け焼刃に過ぎぬ「実用語学」の先で、本当に底力を発揮したのは、あの一見時代遅れな訳読の授業の方だったのだ。洋雑誌を斜め読みする技術は必要が生じれば身につく。だが、たぶんに秘事口伝の要素を含む古今伝授の機会は、学校を離れば永久に失われる。マン

ゾーニの『いいなづけ』は、こうしていつのころからか、評者の内に棲まう貴重な本の一冊となっていた。今その翻訳を手にして、イタリア語の授業でこの作品と出会い、じっくりと読み解いていった日々の幸福を、改めて噛みしめている。

↑ ↓

思えば贅沢な環境があったものだ。半年間でみっちりしかし能率的に文法の基礎をたたきこまれ、さっそくイタリア十九世紀国民文学の傑作の森に分け入るのである。第三外国語の有り難さ、質問責めを「生き残った」受講者の数は六〇七名を越えることもなく、毎回訳読の順番が回ってくるから徹底した少数精鋭の鍛錬場となる。覚えも勘も悪い評者など随分苦勞した記憶があるが、それでも、のっぺらぼうに見えた原文が、予習してて突然三次元に形を成して語りかけてくるのに驚いたり、珍しく気の効いた訳語を捻り出して、お褒めに預かったりして、気分が悪からうはずもない。なによりマンゾーニの語りがまことに「講談のように話がはずんで」、先を読むのが待ち遠しい。

そんな活気あふれる教場で、平川祐弘教授は小節の切れ目ごと、訳読の最後に、持参された訳例を朗読された。時あたかも悪の権化たる老無名士が生涯の罪業の悪夢にさいなまれ、折から近隣の村を訪れていた枢機卿フエデリーゴに面会して劇的な改心を遂げ、囚われの女主人公ルチアが救われるという場

面。小説半ば過ぎ、最大の山場のひとつで、お偉方たちの突然の豹変ぶりに周章狼狽する村の司祭アッボンディオのいかにも小心な人間臭さも、好ましく滑稽に叙述されるあたりであった。

簡潔な記述のうちに人物たちの言動や思惑を描きとめ、人間の性を言い当てる深い洞察が、原文を一語とおろそかにせず、イタリア語そのままの歯切れ良いテンポで明解な日本語に置き換えられる。その手並みの鮮やかさに、なにか騙されたような気さえしたものだ。むしろマンゾーニの文体の何がしかが乗り移って平川節が出来あがっていることに思い至ったのは、評者自身イタリアに旅してその風光と人間とに接した後の事に属する。

既に名訳の誉れ高い完訳版ダンテ『神曲』

(昭和四一年)で、斬新な口語訳を提案しておられた平川教授は、その翌四二年から東京大学駒場のイタリア語の授業を持たれるや、イタリア文学史上ダンテと双璧をなすと見定めたアレッサンドロ・マンゾーニの長編小説『いいなづけ』を躊躇なく教材に選ばれた。

爾来この大作を教室で講じられる傍ら、営々二十年におよぶ精進を重ねてその翻訳に勤しんで来られた末、四百字詰め一九六三枚に及ぶ訳稿が待望久しく、今回刊行に至ったものである。数年毎に海外で教鞭をとり、ほぼ一年に一冊の割で日本近代精神史やラフカディオ・ハーン研究の書物を公刊される傍らでの

お仕事であり、かつて授業に一年間参加したきり、以来あらぬ方を彷徨ってきた学生のひとりとしては、あらためて旧師の精進ぶり、健筆ぶりに賛嘆を禁じえない。

思うに、古典の魅力が学生に伝えるのが、かつては語学教師の務めであった。仏英伊独の達人として知られる国際人、平川教授はその実、古き良き伝統を具現した最後の「一高教師」のおひとりでもあるのだろう。およそ大作の古典名作というものは、読者に矛盾したふたつの「時」を要求する。かたや、一気に通読してその全体を掴む素早さ。と同時に、懐かしい細部を味読し大切に心に刻んでおくゆとり。両者兼ね備えて古典を自分のものとするのは、先達の導きなくしては容易に適わぬ業であるが、逆にそうした教場での精錬を経たからこそ、原文の雰囲気にも忠実なところとあまたの欧語訳にも勝る訳業が成ったのであろう。作家譲りの「刻みの細かい」仕事ぶりには、「一般教養」の授業を愛して止まぬ「語学教師」ならではの味があり、まことに得がたい訳者を得てこそ成就した力業と申すほかない。

いったい、歴史を生き残ってきた古典的テクストを前にすると、我々の想像力の測鉛はその限界を試される。人生の経験を幾何か重ねて初めて、ふと年来疑問の箇所の意味を氷解してくれるような実体験に巡り会うのも、人間にのみ許された、ささやかだが大切な瞬間であらう。先人が苦勞して紡ぎ出した「言葉」も、それだけ容易に、はかなく無意味な文字の戯れへと解体しがちなものなのだろう。所詮文学とは、休みなき消滅へと運命づけられている「意味」というものを繋ぎとめようとする、人間のむなしい抵抗の軌跡だったのかもしれない。常に手遅れでしかない再生産に恒常的な失敗を繰り返して、という事態に「創造」という名を振り当てて居直りを決め込む我々の歴史の宿命的な営みにあって、外国の古典が世代ごとに異なった翻訳を得て読み継がれて行くのも、この間の消息を物語って貴重である。「訳し了えてなにか惜しいような気がしている」という訳者の感慨には、歴史に棹さしてしまった文学者ならではの痛切な響きがある。世界中に五百点以上あるという「*I Promessi Sposi*」の翻訳のなかに、今後のManzoni解釈の指針となるべき一際秀でた日本語訳を加え、文字通りイタリア文学の古典を日本語に「言い名付け」た平川氏の大業を言祝ぎ、いまや活字の姿となったその講筵が、今後末長く世に伝えられてゆくことを切望するものである。

(河出書房新社・九、八〇〇円)



編集後記

▼多くの知識人が共産主義に引きつけられたのは何故か？ 例えば、ブレジンスキーは『大いなる失敗』の中で、大略次のように分析しています。

「偉大な宗教と同様に、人を見て法を説く共産主義は、知識人たちに人間の歴史や経済行動を理解し、社会や政治の変動を評価する尺度として『歴史的弁証法』を与えた。それは、現実の矛盾に立ち向かう有力な武器であり、理性に基づく行動を渴望していたインテリにとって、贖罪のための『革命』を推進する政治活動や、合理的な計画によって公正な社会を実現しようとする国家統制は魅力的であった。しかも、歴史的な根拠のある安心感や、全ては直接的政治行動をとることで得られるという、単純すぎる考えを受け入れた者は、自らの正しさを信じて疑わなかった」戦後日本のジャーナリズムは、この「単純すぎる考え」で体制を批判し、経済的利益を上げました。

▼そもそも大正期の日本は、ロシア革命をどのように受け止めたのでしょうか。大正というと、偉大な父親に反抗して生き急いだ蕩児のような印象がありますが、吉村道男氏の論攷により、日本の国家体制そのものがレーニンズムとウィルソニズムとに挟まれ、極めて不安定な時代であったことがわかります。その不安定な状況の中で、ある者は生温いデモクラシーに飽き足らず、より過激な天皇制打倒の運動に走り、またある者は国家や社会に背を向け、半ば刹那的な気分の中で自己の利

益を追求した……。日本の大陸進出には、大正昭和初期のいわゆる知識人の意識転換を図る面もあったといいますが、だとすれば後の混乱の責任を独り青年将校にのみ課すわけにもいきません。

▼革命から七十三年、木村浩氏はソ連国内が危機的な状態にあることを報告します。——生活物資や食糧が不足し、民衆の心にアナキーな感情が生まれる一方で、知識人たちは政治談義に明け暮れている。また、職場や社会秩序も乱れ、内戦の噂さえ飛んでいる。しかも、民族問題に対しては、力で押さえ込む以外に殆ど解決策がない。ただ、敢えて希望を探せば、(レオノフも言うように)大変な宗教復興ブームであるということです。それがブームに終わることなく、真に民衆が神を取り戻すことができるなら、市場経済の導入による混乱を克服して(それは富の不平等を甘受することでもありません)、国づくりに真剣に取り組むようになるのではないか。現世の不幸を人の力で全て解消できると考えたところに、共産主義の大きな過ちがあるように思います。

▼さて、稲次敏郎氏は、現代の都市型住居「団地」が日本の伝統的な「すまいと道具」の相関性の否定の上に成立していることを踏まえて、階層的なコミュニティスペースの確保を提唱します。望むらくは、その共有空間の中から生活のカター作法が復活し、それが倫理観へと昇華されることです。そうでなければ、戦後の住環境(使ひ捨てることで住まう)の中で肥大してきた「消費願望」を抑えることはできません。

(安田)

本誌は新宿・紀伊國屋書店で取扱っております

文化会 議

平成二年
九月号 (通二五五号)

平成二年九月一日発行

定価四〇〇円(送料五一円)

編集兼発行人 鈴木 重 信

(日本文化会議専務理事)

発行所 財団法人日本文化会議

東京都千代田区紀尾井町三—二三

文藝春秋ビル(千—〇一一)

電話 〇三(二六二)二七五一

印刷所 富士美術印刷株式会社

東京都荒川区西日暮里一六二—八

電話 〇三(八〇三)一一七一

『文化会議』購読の御案内

勅日本文化会議は、昭和四十三年六月、広く我が国の自由の立場に立つ知識人を結集し、文化に関する各分野の有機的な連携をはかり、世論喚起の活動を通じ、日本文化の健全な発展に寄与することを目的として設立されました。爾来、その目的を達成するために、正しい世論形成に向けての活動等を行っております。御友人、御同僚の皆様にご当誌の定期購読をお勧め頂ければ幸甚でございます。振込用紙を用意致しておりますので、右発行所「雑誌係」までお気軽にお電話下さい。

◎月刊『文化会議』購読御希望の方は、住所・氏名、第何号からと御明記の上、右発行所宛お申し込み下さい。

◎振替口座 東京九一七〇九六二

◎年間購読料 五〇〇〇円(送料共)

本誌掲載記事の無断転載を禁じます